【雑想】チャングム（4）　漢方薬による毒の排出・繊細な鍼

斉観堂鍼灸・気功治療院　鈴木斉観

『宮廷女官チャングムの誓い』(以下、『チャングム』)、後半に入って、物語の中心軸は医に移った。前半でも、宮廷の医務官やウンベクが治療するところがあった。

菜園でウンベクが、毒草を誤って食べた女官を吐かせるのに手首内側の中心辺りに鍼をしていた。手の厥陰心包経と言われる経絡で、胸の下半分辺りに通じる。吐き気がするような時に使う。胸の下半分辺りの気を動かし、その場所における本来的な働きを高める。吐き気が止まる場合もあれば、吐き気が強くなって、吐く場合もある。この女官にとっては吐くことが必要であったから、吐いた。

チャングムが占い師の子供を治療するのにも、牛肉のスープを使って吐かせていた。胃袋に血毒や食毒がへばり付いている病態であったわけで、その毒を取り除く処方だった。毒は下痢する形で下から排出されても悪くないが、胃袋にある毒ならば、命にとって、吐いて排出するのがやり易かったわけだ。

このように治療によって、一見悪い症状―この場合は嘔吐―が出る場合があるが、それは治療が効いたからである。ところが、この子供の父親のように誤解する人が多い。症状を無くすことに焦点を置いている西洋医学は、しばしばこうした自己治癒力の働きを抑えてしまう。

日本の吉益東洞はこうした毒こそが全ての病の根本原因であるという医説を提唱した。難病には必要ならば、例えば水銀など毒性が強い生薬を使って毒の排出を促した。その場合には占い師の子供のように、激しい毒の排出反応があったが、その後は長年の持病から解放された。

『チャングム』での治療場面を見ていると、韓国では鍼は特効的・救急的・補助的に使い、根本的な治療は漢方薬でやる方式のように見えた。日本では江戸時代を見ても、現代を見ても、鍼医と漢方医は分れている。もちろん鍼と漢方薬にはその道具の違いによる特徴・長所短所はあるが、鍼医は鍼で全ての病に対応し、漢方医は漢方薬で全ての病に対応しようとした。

『チャングム』で使われていた鍼は中国鍼のようだった。日本の鍼は細く、しなるから、鍼だけでの刺入は難しく、通常、鍼管という管を使っている。杉山和一（江戸時代の鍼医）の創案である。このお蔭で繊細な鍼が可能になった。中国からはよく強刺激する鍼術が伝わって来るが、日本では接触鍼という刺入しない鍼術など弱刺激も特別なものではない。鍼は気を操作する道具であるから、必ずしも刺す必要はないのであり、また患者が感じる必要もない。

鍼には、気を補う補法と気を奪う瀉法がある。弱った患者であれば、補法が中心となる。強刺激は瀉法になりやすい。『チャングム』の時代であれば、鍼の製造技術の問題もあって、鍼先も粗いものであったと想像される。そうすると強刺激になりやすい。皇太后が治療を拒んだ為に治療が遅れ、薬を受け付けなくなった時に、「鍼を打っては？」と言う医女に対してウンベクがこう応えていた。「危険です。気力が極度に衰えている場合、・・」と。現代日本の鍼ならば、こうした問題にはならない。もちろん、刺入しないと効かないと思っている鍼灸師や電気鍼を常用する鍼灸師にはできないことである。（2008年４月穀雨）